ヌ 太十七〇十四　路九〇卅七
ル 太十七〇十四　路九〇卅八
チ 可一〇廿六　路九〇四十二
ワ 太十七〇廿　可十一〇廿三　路十七〇六　約十一〇四十
カ 太十七〇十九
ヨ 太十七〇廿二　路九〇四十四
タ 太十八〇一　路九〇四十六、廿二〇廿四

如く八々意の任に之を待へり○ 十四 イエス弟子等の所にきたり多の人々の彼等を環圍ると學者たちの彼等と論じをりしを見たり 十五 衆人たぶちに彼を見て駭き趨よりて禮をなせり 十六 イエス學者ゐ問けるい弟子と何事を論ずる乎 十七 衆人のうち一人こたへけるい師よ我ものいはぬ惡鬼ゐ憑れたる我子を爾に携來れり 十八 惡鬼の憑時い彼傾跌され沫をふき齒を切て疲勞むつる也これを逐出さんことを我おんぢの弟子に請しかど彼等能ざりき 十九 イエス彼等に答て曰けるい噫信なき世なる哉いつまで我おんぢらと共に在んや何時まで我おんぢらを忍んや彼を我に携來れ 二十 彼等ゐの子を携來りしゐ惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘攣しむ彼地に仆れ輾轉て沫を出ぬ 二一 イエスゐの父に問けるい幾何時より如此ありしや父いひけるい少時より也 二二 惡鬼ゑば〻之を火の中あるひい水の中に投入て殺んとせり爾もし爲ことを得ば我儕を憫みて助よ 二三 イエス彼に曰けるい爾もし信ずる事を得ば信ずる者に於て爲あたむざる事なし 二四 其子の父たぶちに聲をあげ涙を流して曰けるい主よ我信ず我が信なきを助たまへ 二五 イエス衆人の趨集るを見て惡鬼を叱いひけるい啞にして聾なる惡鬼よ我なんぢに命ず出て再び之に入ゐかれ 二六 惡鬼さけびて大に彼を拘攣しめて出しかば彼死たる者の如ありぬ人々これを已に死りと云 二七 イエスゐの手を執て扶ければ彼たてり○ 二八 イエス家に入しに其弟子ひりかに問けるい我儕これを逐出すこと能ざりしい何故ゑ 二九 イエス彼等に曰けるい此族い祈禱と斷食に非れば逐出すこと能ざる也○ 三十 彼等こゝを去てガリラヤを過この事をイエス人の知を欲ざりき 三一 蓋ゐの弟子に教へ人の子い人の手に付され彼等に殺され殺されてのち第三日に甦るべしと曰たまふが故なり 三二 其とき弟子等この言を曉らず亦問これを恐たり○ 三三 偖イエスカペナウンに至り室に居て弟子に問けるい爾曹途間にて何を互に論ぜし乎 三四 弟子默然たり是途間にて互に論じ誰か大ゐらんと

レ 太廿〇廿六、廿七　可十〇四十三
ソ 太十八〇二　可十〇十六
ツ 太十〇四十　路九〇四十八
子 民十一〇廿八　路九〇四十九
ナ 詩十二〇三
ラ 太十二〇卅
ム 太十〇四十二
ウ 太十八〇六　路十七〇一
ヰ 申十三〇六　十八〇八　太五〇廿九、
ノ 箴六十六〇廿四
オ 利二〇十三　箴四十三〇廿
ク 太廿〇十三　路十四〇卅四
ヤ 申四〇廿九　西四〇六、
マ 羅十二〇十八、十四〇十九　哥前十三〇十一　來十二〇十四
イ 太十九〇一　約十〇四十、十一〇七
ロ 太十九〇三

の爭ありけれた也 三五 イエス坐して其十二を召かれらゐ曰けるい若し首たらんと欲ふ者い凡の人の後となり且すべての人の使役となられん 三六 また孩提を取て彼等の中に立て之を抱き彼等ゐ曰けるい 三七 凡ろ我名の爲に斯のごとき孩提の一人を接る者い即ち我を接るなり又われを接る者い即ち我を接るに非ず我を遣し者を接るなり○ 三八 ヨハネ彼に答て曰けるい師よ我儕に從ざる者の爾の名に托て惡鬼を逐出せるを見しが我儕に從ざる故これを禁たり 三九 イエス曰けるい其人を禁る勿れ蓋わが名により異ある能を行ひて輕易しく我を誹得る者なあらじ 四十 我儕に敵たはざる者い我儕に屬者なり 四一 爾曹をキリストに屬者として我名の爲に一杯の水にても爾曹ゐ飲する者い我まことに爾曹に告ん其人い賞を失はざる也 四二 また凡ろ我を信ずる小子の一人を礙する者いろの首ゐ磨を懸られて海に投入られん方ろの人の爲にあは善るべし 四三 若し爾の一手なんぢを礙かさば之を斷され兩手ありて地獄すゐたち滅ざる火に往んよりい殘缺にて永生に入い爾の爲に善てと也 四四 彼處ゐ入ものゝ蟲つきず火きえず 四五 若なんぢの一足ゐんぢを礙かさば之を斷され兩足ありて地獄すゐたち滅ざる火ゐ投入られんよりい跛にて永生に入い爾の爲に善ゐり 四六 彼處に入ものゝ蟲つきず火きえず 四七 もし爾の一眼ゐんぢを礙かさば之を抉いだせ兩眼ありて地獄の火に投入られんよりい一眼にて神の國に入い爾の爲に善なり 四八 彼處に入ものゝ蟲つきず火きえず 四九 蓋すべての人い鹽をつくる如く火を以せられ凡の祭物い鹽をもて鹽つけらる 五十 鹽い善ものなり然ゑ鹽もし其味を失ゑば何をもて之に味を加んや爾曹心の中に鹽を有て又たがひに睦み和ぐべし

第十章

イエス此を去ヨルダンの外を經てユダヤの境の内に來しに多の人々また彼に集りければ恒の如く彼等に教誨を爲たまへり 二 パリサイの人來て彼を試み問けるい人ろの妻を出すい可か 三 答て曰けるい

ハ 申廿四〇一　太五〇卅一、十九〇七
ニ 創一〇廿七、五〇二
ホ 創二〇廿四　哥前六〇十六　明五〇卅一
ヘ 太五〇卅二、十九〇九　路十六〇十八　羅七〇三　哥前七〇十、十一
ト 太十九〇十三　路十八〇十五
チ 哥前十四〇廿　彼前三〇二
リ 太十八〇三
ヌ 太十九〇十六　路十八〇十八
ル 出廿〇　羅十三〇九
ヲ 太六〇十九廿、十九〇廿一　路十二〇廿三、十六〇九
ワ 太十九〇廿三　路十八〇廿四

モーセハ爾曹に何と命ぜし乎　彼等曰けるハモーセハ離縁狀を書與へて之を出すことを許せり　五 イエス答て彼等に曰けるハモーセ爾曹の心つれなきに因て此命を爲たる也　然ど開闢のはじめ神人を男女に造り給へり　七 是故ゐ人ハろの父母を離ろの妻ゐ合て　八 二人のもの一體と成べし然バ二ゐハ非ず一體なり　九 是故に神の繋せ給へる者ハ人これを離すべからず○　十 室に在て弟子等また此事を問けれバ　十一 イエス彼等に曰けるハ凡ろ其妻を出して他の婦を娶る者ハ其妻ゐ對して姦淫を行ふなり　十二 また婦もし其夫を出して他に嫁ゲバ此婦も姦淫を行ふなり○　十三 イエスに撫れんゲため人々孩提を携來れバ弟子等ろの携來れる者を責めたり　十四 イエス之を見て怒を含かれらに曰けるハ孩提を我に來せよ彼等を禁る勿れ神の國に居ものハ斯の如き者あり　十五 誠に我ゐんぢらに告ん凡ろ孩提の如くに神の國を承ざる者ハ之に入ことを得ざる也　十六 即ち彼等を抱て手をうの上に接これを祝せり○　十七 イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるハ善師よ我かぎりあき生命を嗣ために何を行べき乎　十八 イエス彼に曰けるハ何ぞ我を善と稱や一人の外に善者なし即ち神なり　十九 誠ハ爾ゐ識ところなり姦淫する勿れ殺なかれ盗なかれ妄の証を立る勿れ拐騙なかれ爾の父と母を敬へ　二十 答て曰けるハ師よ是みな我ゐ幼きより守れるもの也　二十一 イエス彼を見て愛み曰けるハ爾なほ一を虧ゆきて其所有をうり貧者に施せ然バ天に於て財あらん而して來り十字架を操て我に從へ　二十二 彼この言に因て哀み憂て去ぬ彼ハ大ある產業を有る者なれゆえあり　二十三 イエス環視てろの弟子に曰けるハ財を有る者の神の國に入ハ如何に難かな　二十四 弟子この言を駭けりイエス復たへて彼等に曰けるハ小子よ財を恃む者の神の國に入ハ如何に難かな　二十五 富者の神の國に入よりハ駱駝の針の孔を穿るハ却て易し　二十六 弟子たち甚く駭き互に曰けるハ然バ誰か救を受べき乎　二十七 イエス彼等を見て曰けるハ是人にハ能ざる所あれど神に於ハ然らず神ハ能ざる所なければ也　二十八 是に於てペテロ彼に曰けるハ我儕一切を舍て爾に從へり　二十九 イエス答て曰けるハ誠に爾曹に告ん我と福音の爲に家宅あるひハ兄弟あるひハ姉妹あるひハ父あるひハ母あるひハ妻あるひハ兒女あるひハ田疇を舍る者ハ　三十 この世にて百倍を受ざる者なし即ち家宅兄弟姉妹母兒女田疇を迫害ど共に受また後の世にハ窮おき生を受ん　三十一 然ど多の先ある者ハ後ゐあり後なる者ハ先になるべし○　三十二 さて彼等エルサレムゐ上る途間イエス弟子ゐ先ち行ければ彼等おどろき且おそれて從へり　イエス十二を伴ひて將ゐ己ゐ及んとする事を彼等に告給ひけるハ　三十三 我儕エルサレムゐ上り人の子ハ祭司の長と學者等ゐ付れん彼等これを死罪に定め異邦人に付し　三十四 又これを嘲ち鞭ち唾し且こゝを殺ん斯て第三日ゐ甦るべし○　三十五 ゼベダイの子ヤコブとヨハネイエスゐ來りて曰けるハ師よ我儕ゲ求る事を願くハ我儕に成たまへ　三十六 彼等に曰けるハ爾曹ゐ我ゲ何を成ん事を欲ふや　三十七 彼等いひけるハ爾榮を得んとき我儕の一人を其右に一人を其左に坐せしめよ　三十八 イエス彼等に曰けるハ爾曹ハ求ふ所を知ず爾曹わが飲ところの杯を飲わが受る所のバプテスマを受得るや　三十九 彼等いひけるハ能すべしイエス彼等に曰けるハ爾曹ハ實に我が飲ところの杯を飲また我が受る所のバプテスマを受べし　四十 然ど我が右左に坐する事ハ我が予ふべきに非たゞ備られたる者ハ予らるべし　四十一 十人の弟子これを聞てヤコブとヨハネを憤れり　四十二 イエス彼等を召て曰けるハ異邦人の君と見る者ハ其民を治また大なる者どもハ彼等の上に權を執これ爾曹が知ところ也　四十三 然ど爾曹の中にてハ然す可らず爾曹のうち大ならんと欲ふ者ハ爾曹に役るゝ者とおらん　四十四 また爾曹のうち首たらんと欲ふ者ハ凡の人の僕とならん　四十五 蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且ゐほくの人に代ろの命を予て贖とならん爲なり○　四十六 斯て彼等エリコに至りイエスろの弟子と大ある群

ヨ 耶廿二〇十七　太十九〇廿
タ 太十九〇廿七　路十八〇廿七
レ 代下廿五〇九　路十八〇廿
ソ 太十九〇廿、廿〇十六　路十三〇廿
ツ 太廿〇十七　路十八〇廿一
子 可八〇廿一、九〇廿一　路九〇廿二、十八〇廿一
ナ 太廿〇廿
ラ 太廿〇廿四
ム 路廿二〇廿五
ウ 太廿〇廿六、十八　可九〇廿五　路九〇四十八
非 詩十三〇十四　腓二〇七
ノ 太廿〇廿八　提前二〇六　多二〇十四
オ 太廿〇廿九　路十八〇廿五

ク 太九〇廿二　可五〇卅四
イ 太廿一〇一　路十九〇廿九　詩十二〇十四
ロ 太廿一〇八
ハ 詩百十八〇廿六
ニ 詩百四十八〇一
ホ 太廿一〇十二
ヘ 太廿一〇十八
ト 太廿一〇十九

集の人々と共にエリコを出る時テマイの子おるバルデマイといふ瞽者路の旁に坐して乞ゐけるが ナザレのイエスおりと聞て呼り曰けるゐダビデの裔イエスよ我を恤み給へ 多の人々これに緘默と戒めれども愈よ〳〵ばゝりてダビデの裔よ我を恤み給へと曰ければ イエス立止りて彼を召と命じければ人々瞽者を召て彼に曰けるゐ心を安んぜよ起イエス爾を召 瞽者うの表衣を棄たちてイエスに來れり イエス答て彼に曰けるゐ爾われに何を爲れんと欲ふや瞽者いひけるゐ主よ見なん事を欲ふ イエス彼に曰けるゐ往おんぢの信仰おんぢを救へり直に彼みゆることを得 イエスに從ひて路を行り

第十一章 かれら橄欖山のベツパゲとベタニヤに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして 彼等に曰けるゐ爾曹對面の村に往かしこに入ば頓て人の未だ乘ざる所の繫げる驢馬の子を見べし其を解て牽來れ もし誰か爾曹に何ゆゑ然する乎といふ者あらば主の用おりと曰さらば直に其を此に遣るべし 彼等ゆきて門の外の岐路に繫げる驢馬の子を見て之を解ければ 其處ゐ立る人々のうち或人かきちに曰けるゐ此驢馬の子を解て何如する乎 弟子イエスの命ぜし如く曰しかば遂に許たり 弟子驢馬の子をイエスに牽きたりて己が衣を其上に置ければイエスこれに乘り 人々おほくゐ其衣を路上に布あるひゐ樹の枝を伐て路上に布 かつ前ゐゆき後に從ふ人々呼り曰けるゐホザナよ主の名ゐ託て來る者ゐ福なり 主の名に託て來る我儕の父なるダビデの國ゐ福なり至上處にホザナよ〇 イエスエルサレムに至り聖殿ゐ入て盡くみまはし時すでに暮に及ければ十二と偕にベタニヤに出往り〇 明日かれらベタニヤより出し時イエス饑たり 遙ゐ葉ゐる無花果の樹を見てその樹に何か有んとて來しに葉の他なにも見ざりき是無花果樹の時に非れば也 イエスこの樹に對て今よりのち永久も爾の果を食ふ人あらざれと

チ 太廿一〇十二　路十九〇四十五　詩二〇十四
リ 雅五十六〇七
ヌ 耶七〇十一
ル 太廿一〇四十五　路十九〇四十六
ヲ 太七〇廿八　路四〇卅二　可一〇廿二
ワ 太廿一〇十九
カ 太十七〇廿、廿一〇廿一　路十七〇六
ヨ 太七〇七　路十一〇九　詩十四〇十三、十五〇七、十六〇廿四　雅一〇五、六
タ 太六〇十四　西三〇十三
レ 太十八〇卅五
ソ 太廿一〇廿三　路廿〇一
ツ 太三〇五、十四〇五　可六〇廿
イ 太廿一〇卅三　路廿〇九

いふ弟子これを聞り〇 彼等エルサレムに至りイエス殿に入てうの中にをる賣買する者を殿より逐出し兌銀者の案鴿を鬻者ゝ椅子を倒し かつ器具を以て殿を過ることを許さず また彼等に諭て曰けるゐ我室ゐ萬國の人の祈禱の室と稱らるべしと錄されたるに非や然るに爾曹ゐ之を盜賊の巣となせり 學者と祭司の長とを聞て如何してかイエスを喪さんと謀しゐ彼を懼たり蓋人々みゐ其教に駭きたれば也〇 日くれてイエス城邑を出行り 翌朝かれら無花果の樹を過る時うの根より盡く枯たるを見る ペテロ憶出てイエスゐ曰けるゐラビ見よ詛し所の無花果樹ゐ枯たり イエス答て彼等に曰けるゐ神を信ぜよ 誠に我おんぢらに告ん誰にても其心ゐ疑ふ事おく其いふ所の言ゐ必ず成べしと信じ此山に移て海ゐ入といむゑ其言の如く成べし 是故に我おんぢらに告ん凡うゐ祈禱の時うの求ふ所のものゐ必ず得べしと信ぜば必ず得べし 又なんぢら立て祈禱する時もし人を憾こと有ば之を免せ蓋天ゐ在す爾曹の父に爾曹も亦うの過を免されん爲なり もし爾曹免さずば天に在す爾曹の父も亦なんぢらの過を免し給はじ〇 彼等またエルサレムに至りイエス殿を行るとき祭司の長學者および長老等きたりて 彼に曰けるゐ何の權威を以て此事を行や誰が此事を行べき爲に爾に此權威を與しや イエス答て彼等ゐ曰けるゐ我も一言なんぢらゐ問ん我ゐ答よ然ば我なんぢらに何の權威を以て之を行といふ事を告べし ヨハネのバプテスマゐ天よりか人よりか我に答よ 彼等たがひに論じ曰けるゐ若し天よりと云ば然ば何故彼を信ぜざるかと曰んもし人よりと云ば彼等民を懼たる也うゐ民みおヨハネを預言者と爲に因 遂に答て知ずと曰イエス答て曰けるゐ我も何の權威を以て之を行か爾曹に語らじ

第十二章 イエス譬をもて彼等ゐ語れり或人葡萄園を樹り籬を環し酒搾をほり塔をたて農夫に租與て

他の國へ往しゞ　二期いたりければ葡萄園の果を收取ん爲に僕を農夫の所に遣しけるに　三農夫等これを執へ打撲きて徒く返しめたり　四また他の僕を彼等に遣しゝに農夫等こゝを石にてうち首に傷つけ辱しめて返しむ　五又ほかの者を遣しゝを也を殺せり又ほかに多く遣しゝに或い撲あるひい殺しぬ　愛ゐ一人の愛子ありけるゞ此わが子い敬ふならんと曰て遂に其子を遣しゝに　六農夫等たがひに曰けるい此い嗣子なり率れを殺さん然ば產業い我儕の者とおらん　七乃ち執へて之を殺し葡萄園の外に棄たり　八然ば葡萄園の主人なにを爲べきか彼きたりて農夫等を打滅し葡萄園を他の人ゐ託ふべし　九工匠の棄たる石い屋の隅の首石と成り　十これ主の成たまへる事にして我儕の目に奇とする所ありと錄されしを未だ讀ざる乎　十一彼等この譬い己等を指て語れりと知イエスを執んとせしかども衆人を懼てイエスを去ゆけり○　十二彼等イエスを其言に由て陷いれんとしてパリサイの人とヘロデの黨の中より數人を遣せり　十三遣されし者等イエスの所に來り曰けるい師よ爾い眞なる者なり又誰にも偏らざる事を我儕い知ろい貌に依て人を取ず誠を以て神の道を敎れば有貢をカイザルに納るい宜や否わをら納べきか納ざる可か　十四イエスろの實あらざるを知て彼等に曰けるい何ゞ我を試るやデナリを携來りて我に觀よ　十五かをら携來りけを也イエス彼等に曰けるい此像と號い誰か答てカイザルなりと曰　十六イエス曰けるいカイザルの物いカイザルに歸し又神の物い神に歸すべし彼等こゝを奇とせり○　十七復生なしと曰なせるサドカイの人きたりてイエスに問けるい　十八師よ我儕にモーセが書遺るにい人の兄弟もし子なくして妻を留し死ばろの兄弟この妻を娶て兄弟の裔を立べしと　十九爰に七人の兄弟ありしが長子妻をめとり子なくして死　二十第二の者これを娶また子なくして死　二十一第三もまた然す七人みな之を娶たれど子なく終にい此婦も死り　二十二復生の時かれら甦らば此婦い誰の妻

ロ 鬱百十八〇廿二
ハ 太廿一〇四十五、四十六　可十一〇十八　路七〇廿五、廿四十四
ニ 太廿二〇十五　路廿〇廿
ホ 太十八〇廿八
ヘ 徒廿三〇八
ト 太廿二〇廿三　路廿〇廿七
チ 申廿五〇五

と爲べきか蓋七人おなじく之を娶たゝを也　二四イエス答て彼等に曰けるい爾曹い聖書をも神の能をも知ざるに因て謬をるならず乎　二五うゝを死より甦る時い娶ず嫁ゞず天にある使者等の如し　二六死し者の甦る事に就ていモーセの書棘中の篇に神かゝに語て我いアブラハムの神イサクの神ヤコブの神おりと曰たまひしを爾曹讀ざる乎　二七神い死し者の神に非ず生る者の神なり爾曹大に謬をり○　二八學者の一人かれらの議論を聞てイエスの善こゝに應しを知きたり彼に問けるい諸誡のうち何れ首おる乎　二九イエス彼に答けるい諸誡の首いイスラエルよ聽け主おる我儕の神い即ち一の主おり　三十おんぢ心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡し主おる爾の神を愛すべし是誡の首おり　三一第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし斯より大おる誡おし　三二學者イエスに曰けるい善かお師よ爾神い即ち一にして他に神おしと曰しい誠おり　三三また心を盡し知慧を盡し精神を盡し力を盡して之を愛し又おのれの如く隣を愛するい諸の燔祭と禮物よりも愈るおり　三四イエス彼が道理を知る答を見て之に曰けるい爾神の國より遠からず此のち敢てイエスに問者おかりき○　三五イエス殿に在て敎誨を爲る時かをらに答て曰けるい何ゞ學者いキリストをダビデの裔といふ乎　三六夫ダビデ聖靈に感して自いふ主わが主に曰けるい我おんぢの敵を爾の足凳とおすまで我右に坐せよと　三七如此ダビデ自ら彼を主と稱たり然ば如何で其裔たらんや多の人々喜てイエスに聞ことを爲せり○　三八イエス敎をおせる時かをらに曰けるい長き衣服を衣てあるき市上にて人の問安　三九會堂の高座筵席の上座を好　四十また嫠婦の家を呑いつはりて長き祈をする學者を謹防よ彼等の罪せらるゝこと尤も重し○　四一イエス賽錢の箱に對て坐し人々の錢を箱に入るを見たまひしに多の富者い多く投入たり　四二一人の貧き嫠婦きたりてレプタ二を投入る此い四厘ばゝに直れり　四三イエスろの弟子を召て彼等に曰けるい誠に我おんぢらに

リ 番番十五〇四十二、四十九、五十二
ヌ 出三〇六
ル 太廿二〇卅五
チ 申六〇四　路十〇廿七
ワ 利十九〇十八　太廿二〇卅九　羅十三〇九　加五〇十四　雅二〇八
カ 申四〇卅九　鬱四十五〇六、十四、四十六〇九
ヨ 母上十五〇廿二　何六〇六　米六〇六、廿八
タ 太廿二〇四十六
レ 太廿二〇四十一　路廿〇四十一
ソ 母下廿三〇二　鬱百十〇一
子 可四〇二
ナ 太廿三〇一　路廿〇四十六
ラ 路十一〇四十三
ム 太廿三〇十四　路廿一〇一
ウ 路十一〇一
井 太十〇九
ノ 王下十二〇九

オ 普後八〇十二
ク 申廿四〇六 約翰三〇十七
イ 太廿四〇一 路廿一〇五
ロ 路十九〇四十四
ハ 太廿四〇三 路廿一〇七
ニ 耶廿九〇八 申五〇六 撒前二〇三

ホ 太廿四〇八
ヘ 太十〇七、十八、廿四〇九 默二〇十
ト 太廿四〇十四
チ 太十〇十九 路十二〇十一、廿一〇十四
リ 徒二〇四、四〇八、卅一
ヌ 米七〇六 太十〇廿一、廿四〇十 路廿一〇十六
ル 太廿四〇九 路廿一〇十七
ヲ 但十二〇十二 太十〇廿二、廿四〇十三 默二〇十
ワ 但九〇廿七
カ 太廿四〇十五
ヨ 路廿一〇廿一

タ 路廿一〇廿三、廿三〇廿九
レ 但九〇廿六、十二〇一 耳二〇二 太廿四〇廿一

告げ箱に投入し凡の人々よりも此貧き嫠婦ハ多く投入たり　四四　うた彼等ハ皆ろの餘れる所を以て入この婦ハうの不足ところより其すべての所有すなわち全業を盡く入たれば也

第十三章　イエス聖殿より出ければ一人の弟子かをに曰けるハ師よ觀たまへ此石この殿宇いかに盛んならず乎　二　イエス答て曰けるハ爾曹この大なる殿宇を見か一の石も石の上に圮れずしてハ遺じ　三　イエス橄欖山にて殿に對ひ坐し給しにペテロヤコブヨハチアンデレ竊に問けるハ　四　何の時この事あるや又すべて此事の成ん時ハ如何なる兆あるや我儕に告たまへ　五　イエス答て彼等に曰けるハ人に欺かれざるやう慎めよ　六　蓋おほくの人わが名を冒來り我ハキリストなりと曰て多の人を欺くべし　七　爾曹戰と戰の風聲を聞とき懼るゝ勿を是等の事ハみな有べきなり然ども末期ハ未だ至らず　八　民ハ起て民をせめ國ハ國を攻また所〻に地震あり饑饉變亂あり是等ハ苦難の始なり　九　爾曹みづから慎めよ蓋おんぢら集議所に付され又會堂にて撻たれ且證を爲んため我事に因て侯および王の前に曳立らるべし　十　而して福音ハまづ萬民に宣傳ざるを得ず　十一　人おんぢらを曳解さば以前より何を言んと慮また思煩ふ勿れ惟なんぢら其とき賜ふ所の言を曰べし蓋ものいふ者ハ爾曹に非ず聖靈なり　十二　兄弟ハ兄弟を死わ付し父ハ子を付し亦子ハうの父母に逆ひて之を死しめ　十三　又おんぢらハ我名わ緣て凡の人わ憎るべし然ど終まで忍ぶ者ハ救るゝことを得ん　十四　預言者ダニエルが言し所の殘暴にくむ可ものれ立べからざる所に立を見ば(讀者よく思べし)其時ユダヤにをる者ハ山わ遁れよ　十五　屋上にをる者ハ室わ下る勿を又物を取んとて其家わ入おかを　十六　田にをる者ハ其衣服を取んとて歸る勿れ　十七　其日にハ孕る者と乳を哺する婦ハ禍なる哉　十八　なんぢら冬にぐることを免れん爲わ祈れ　十九　其日に患難あらん此の如き患難ハ神の物を創造たまひし開闢より今に至るまで有ざりき亦後にも有じ　二十　もし主うの日を減少し給ずば一人だに救るゝ者なし然ど主の選たまへる所の選れし者の爲に其日を減少し給ふべし　二一　其時もしキリスト此にあり彼に在と爾曹にいふ者あるとも信ずる勿れ　二二　そ偽キリスト偽預言者おこりて休徵と奇能を行ひ選れたる者をも欺くことを得ば欺くべければ也　二三　おんぢら慎よ我預じめ爾曹に盡く之を告　二四　厥時この患難れのち日ハ晦く月ハ光を失ひ　二五　天の星ハおち天の勢ひ震ふべし　二六　其とき人々ハ人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に現れ來るを見ん　二七　また其とき人の子うの使者等を遣して地の極より天の極まで四方より其選れし者を集むべし　二八　夫おんぢら無花果樹に由て譬を學ろの枝すでわ柔かにして葉めぐめば夏の近を知　二九　此の如く爾曹も凡て是等の事を見ば時ちかく門口に至ると知　三十　われ誠わ爾曹に告ん是等の事ことゝく成まで ハ此民ハ逝ざるべし　三一　天地ハ廢ん然ど我言ハ廢じ　三二　其日うの時を知者ハ惟わが父のみなり天にある使者も子も誰も知者おし○　三三　此日いづれの時きたる乎を知ざれば爾曹つゝしみて目を醒し祈禱せよ　三四　うれ人の子ハ遠行せんとして其權を僕等わ委ね各に爲べき事を任け又閽者に怠らず守をと命じて家をさる人の如し　三五　是故に爾曹も怠らずして守れ蓋家の主人あるひハ夕あるひハ夜半あるひハ鷄鳴時あるひハ早晨に歸るかを知ざるを也　三六　恐くハ不意の時きたりて爾曹の眠るを見ん　三七　われ怠らずして守れと爾曹に告るハ即ち凡の人に告るなり

第十四章　さて逾越即ち除酵節の二日前に祭司の長と學者だち詭計を以てイエスを執へ殺さんとし　二　曰けるハ祭の日にハ爲べからず恐くハ民の中に亂ふこらん○　三　イエスベタニヤの癩病シモンの家にて食し居たまへる時ある婦ハ石の盒に價貴きナルドの香膏を盛て携來り其盒を裂りイエスの頭に膏を沃たり　四　或人々互に怒を含いひけるハ此膏を糜すハ何故ぞや　五　之を鬻ば三百有奇のデナリを得て貧者に施す

ソ 太廿四〇廿三 路十七〇廿三、廿一〇八
ツ 彼後三〇十七
子 但七〇十 雷一〇十五 太廿四〇廿九 路廿一〇廿五
ナ 但七〇三、十四 太十六〇廿七、廿四〇卅 可十四〇六十二 徒一〇十一 撒後二〇七 前四〇十六 撒後一〇七 十 默一〇七
ラ 太廿四〇卅二 路廿一〇廿九
ム 雲四十〇八
ウ 太廿四〇四十二、廿五〇十三 路十二〇四十、廿一〇卅四 羅十三〇十一 撒前五〇六
井 太廿四〇四十五、廿五〇十四
ノ 太廿四〇四十二、四十四

イ 太廿六〇二 路廿二〇一 約十一〇五十五、十三〇一
ロ 太廿六〇六 約十二〇一、三 路七〇卅七
ハ 太十八〇廿八

ニ 申十五〇十一
ホ 太廿六〇十四　路廿二〇三、四
ヘ 太廿六〇十七　路廿二〇七
ト 太廿六〇廿
チ 太廿六〇廿四　路廿二〇廿二
リ 太廿六〇廿六　路廿二〇十九　帮前十一〇廿三
ヌ 太廿六〇廿

ことを得んと此婦を言咎む　六 イエス曰けるゝ彼に係る勿れ何ぞ此婦を擾すや我に善事を行へる也　七 貧者ゝ常に爾曹と偕に在ゞ爾曹意に隨せて彼等を濟ることを得べし我ゝ常に爾曹と偕に在ず　八 この婦ゝ力を盡して作り蓋あらかじめ我を葬る爲わが身に膏を沃しおり　九 我まことに爾曹に告ん天の下いづくにても此福音を宣傳らるゝ處にゝ此婦の行し事も亦ろの記念の爲に言傳らるべし　十 さて十二の一人なるイスカリヲテのユダイエスを付さんとて祭司の長に往しに　十一 彼等これを聞て悅び銀子を予んと約せしかゞユダゝイエスを付さんと機を窺へり○　十二 除酵節の首の日すなはち逾越の羔を殺すべき日弟子イエスに曰けるゝ逾越の食を何處へ往て我儕備ふべき乎　十三 イエス二人の弟子を遣さんとして之に曰けるゝ京城わ往さらゞ水を盛たる瓶を擎る人に遇べし之わ從へ　十四 ろの入ところの家の主人に師いふ我弟子と偕わ逾越を食すべき客房ゝ安に在やと曰　十五 然れゞ彼陳設たる大なる樓房を爾曹に示べし我儕の爲に其處に備よ　十六 弟子ゆきて京城に入しにイエスの曰たまへる如く遇しかゞ逾越の備をなせり○　十七 日暮てイエス十二の弟子と偕に來れり　十八 かれら席に就て食する時イエス曰けるゝ誠に我なんぢらに告ん我と偕に食する爾曹のうち一人われを賣すべし　十九 彼等憂て各々イエスに言出けるゝ我わる乎また他の一人も曰けるゝ我わる乎　二十 イエス答て曰けるゝ十二の中の一人われと共に手を盂に着る者是わり　二一 人の子ゝ已に就て錄されたる如く逝ん然ど人の子を賣す者ゝ禍わある哉ろの人ゝ生ざりしあらゞ宰わりし爲ん　二二 かれら食する時イエスパンを取て祝し之を擘かきらに予て曰けるゝ取て食へ此ゝ我身わり　二三 また杯を取て謝し彼等わ予けれゞ皆この杯より飲り　二四 イエス曰けるゝ此ゝ新約の我血にして衆の人の爲に流す所のもの也　二五 我まことに爾曹に告ん今よりのち新しきものを神の國にて飲ん日までゝ葡萄にて製るものを飲じ○　二六 かれら歌を詠て

ル 太廿六〇卅一
チ 亞十三〇七
ワ 可十六〇七
カ 太廿六〇卅三、卅四　路廿二〇廿三、卅七、卅八　約十三〇廿六
ヨ 太廿六〇卅六　路廿二〇卅九　約十八〇一
タ 約十二〇廿七
レ 羅八〇十五　加四〇六
ソ 來五〇七
ツ 約五〇廿六〇卅八
子 羅七〇廿三　加五〇十七
ナ 約十三〇一
ラ 太廿六〇四十六　約十八〇一、二
ム 太廿六〇四十七　路廿二〇四十七　約十八〇三
ウ 太廿六〇五十五　路廿二〇五十二

橄欖山わ往り　二七 イエス彼等に曰けるゝ今夜おんぢら皆われに就て礙かん蓋われ牧者を擊ん其とき綿羊散べしと錄さるたを也　二八 然ゞ我よみゞへりて後なんぢらに先ちガリラヤに往べし　二九 ペテロイエスに曰けるゝ假令みお礙くとも我は然らず　三十 イエス彼に曰けるゝ我まことに爾に告ん今日この夜鷄二次鳴まへに爾三次われを知ずと曰ん　三一 彼また力言いひけるゝ我ゝ爾と偕に死るとも爾を知ずと曰し弟子みお如何いへり　三二 斯て彼等ゲッセマヲといふ所に至りイエスろの弟子に曰けるゝ祈る間こゝに坐せよ　三三 遂わペテロヤコブヨハヲを伴ひゆき甚しく憂ひ哀を催し　三四 彼等わ曰けるゝ我心いたく憂て死るたかりおり爾曹こゝに待て目を醒し居　三五 イエス少し進行て地わふし祈り曰けるゝ若かおゝゞ此時を去しめ給へ　三六 また曰けるゝアバ父よ爾わ於てゝ凡の事能ざるおし此杯を我より取たまへ然ど我ゞ欲ふ所を成んとするに非ず爾ゞ欲ふ所わ任せ給へ　三七 イエス來りて彼等の寢たるを見ペテロわ曰けるゝシモンなんぢ寢たるか一時も目を醒し居ること能ざる乎　三八 誘惑わ入ぬやう目を醒かつ祈ろの心神は願なれど肉體よわき也　三九 復ゆきて同言を曰て祈れり　四十 返りて復かれらの寢たるを見る此は彼等ろの目倦たるなりイエスに何と對ふ可やを知ざりき　四一 三次きたりて彼等に曰けるゝ今ゝ寢て安め充分なり時いたれり人の子ゝ罪人の手に賣さるゝ也　四二 起よ我儕ゆくべし我を賣す者近けり○　四三 斯いへる時たゞちに十二の一人なるユダ刃と棒とを携たる多の人々と共に祭司の長學者および長老の所より來る　四四 イエスを賣者かれらに號をなして曰けるゝ我が接吻する者ゝ其なり之を執て慎と曳去よ　四五 即ち來りてイエスに近よりラビラビと曰て接吻せり　四六 人々手をイエスに措て執ふ　四七 傍に立る者の一人刃を拔て祭司の長の僕を擊ろの耳を削り　四八 イエス答て彼等に曰けるゝ刃と棒とをもち盜賊を執る如くして我を執に來る乎　四九 われ日々おんぢらと共に殿にて教しわ爾曹わ